

都高退教ニュース

NO. 86

2015年4月01日

東京都高等学校教職員組合退職者会

千代田区一ツ橋2-6-2 都高教内
HP: tokokyotaisyoku.dokkoisho.com



「小松川閘門」部分(江東区「大島小松川公園・風の広場」)

閘門(こうもん)とは水位の異なる二つの水面を調節して船を通行させる特殊な水門。小名木川・旧中川と荒川(放水路)との水位差を解消させるため、昭和5年に完成した。当時、隅田川～利根川という東西を通じる水運が盛んであった。すでに役目を終えて、元あった場所に保存されている。現在、南側に同じ仕組みの「荒川ロックゲート」が完成している。
(写真提供: K・Hさん)

都高退教定期総会

6月5日(金)

15:00~

日本教育会館7階
703

年に一度の総会です。会員の方々の積極的なご参加をお願いします。

終了後、「原発学習会」を行います。

メーデー

5月1日(金)

10:00~

日比谷野外音楽堂内
緑の退職者会の旗の下
(「都高教」の旗近く)

今年も元気でお会いしましょう!

終了後、「懇親会」を開きます。

自主映画会

「標的の村」

4月15日(水)

14:30~

16:00

文京区地域活動センター 地下ホール
(南北線「本駒込」駅下車5分)

会費:1000円
ぜひ大勢、ご参加下さい。

都高教退職者会・HP検索は、「都高教退職者会」。<http://tokokyotaisyoku.dokkoisho.com/>

も く じ

「かつての満州ありて、今の我あり。」 田岡純一郎さんへのインタビュー	2
「新兵は考える」 森 精	5
辺野古・キャンプ・シュワブの坐込みは「反基地闘争」のシンボル 安藤 哲雄	6
日退教第5次沖縄交流団に参加して 本村富美子	9
福島県の子供たちの甲状腺癌 後藤 康彦	10
「安倍政権の女性活躍？ 3法案を読む！」 本村富美子	17
「東京歴史散歩～野川をたどる～」を終えて 川口 政利	18
～義務制から2人、高校からは6人が参加しての都退職者会囲碁大会～ 川口 政利	19
杉浦再任用更新拒否高裁判決報告 杉浦 孝雄	20
東京「君が代」裁判第3次訴訟地裁判決出る！ 花輪紅一郎	21
2014年度「憲法学習会」報告 「生きているからには、絶望しないで必ず希望を持って生きていこう」 (沢地 久枝さん)	22
カンパのお礼とお願い	23
読 書 『未明の闘争』（保坂和志）講談社	24
今どきの「落語」案内—初心者のための 第7回 立川流のベテランたち（その1） アズキアライ	25



「かつての満州ありて、今の我あり。」

(田岡純一郎さんへのインタビュー)

現役時代はあまり接点がないままでしたが、退職後、「退職者会」の会合ではしばしばお話しをする機会を得ました。

特に満州でのさまざまな出来事をお聞きし、その痛切な体験を誰彼となく涙ながらにお話する姿に接して、あらためてまとめてお話しをおうかがいすることになりました。

2月某日。都高教本部にて。

1936（昭和11）年8月31日生まれ。現在78歳。旧満州の安東（アントン・現丹東）で生まれた。安東は、鴨緑江をはさんで北朝鮮と対峙する町。この年は、2・26事件があり、ベルリン・オリンピックが開かれた年。臨月だった母親が、「前畑頑張れ！ 前畑頑張れ！」と応援していて、「そんなに興奮するとお腹の子に障る」と言われた。

おやじは憲兵隊の伍長だったが、私が生まれる直前に退役して、満州国政府で警務指導官の仕事をするようになった。私が生まれてから、鴨緑江につくるダム建設で埋没する村人を説得する仕事をした後、斉齊哈爾（チチハル）に移った。

1945年8月4日、父親と私の目の病気のために新京（長春）の病院に行った帰り、ソ連軍の参戦を知り、16日には馬車（現地では「駄車（ダーチョ）」と言っていた）を雇い、南下することにしたが、その準備の最中、15日11時（日本時間正午。時差の関係）に玉音放送を聞く。おやじは「あっ、負けた」と。その瞬間から世界ががらりと変わってしまった。安全な町が安全でない町に変わってしまった。

17日にはソ連軍の進駐。婦女は暴行されるという、という噂がたち、女性達は髪の毛をバリカンで刈って丸坊主にし、男物のワイシャツを着る、ということに。女学校に通っていた隣のお姉さんがそんな格好をして外に出てきたのには驚いてしまった。

ソ連軍によって治安は保たれていたが、ゲーペーウ（ソ連の憲兵）の目を盗んでは下級兵が民家に来ては腕時計等をみんな持って行ってしまうこともあった。食料品等は、帝国陸軍の倉庫に米や砂糖、味噌などがたくさん残されたままだった、見たこともないチョコレートなども。それらを中国人が略奪し、我々日本人に売っていた。

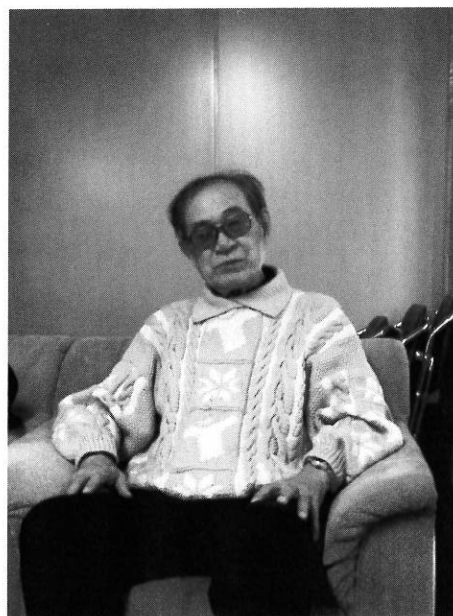
海拉爾（ハイラル）等もっと北の方からソ連軍の砲火に追われ自力で歩いて来た人も多くいて、映画館や学校が収容所になっていた。

秋、ソ連軍の一斉戸別訪問があった。我が家にも来て、軍服姿のおやじの写真を見つけたが、従兄の写真だと説明し、おやじは連れて行かれなかった。それは、祖母が中国語が堪能だったので、間に立った中国人の通訳がこの人の話にウソはないと言ってくれたおかげだった。

晩秋早朝、大勢の男達がトラックに乗せられてシベリアに連れて行かれた。数日前の一斉戸別訪問はその人選も兼ねていたのだと、その時わかった。

ソ連軍と入れ替わりに中国（中華民国）軍が進駐したが、年が明けるとまもなく中国軍が去り、一日おいて人民軍（八路軍、通称「パーロ」）が来た。戦火を交えず軍事境界線が動いた。

翌1947年8月17日、「退去証明書」を発行してもらい、日本へ帰国することになった。この証



明書がないと帰国できない。証明書がない者は、後に残留孤児（日本人）となってしまった。たった紙1枚で運命が別れてしまう。

《田岡さんは、この証明書を今でも大切に保存し、そのコピーを見せてくれた。すでに赤茶けた紙には、家族6人それぞれの氏名が記され、同地の日本人会会長の証明・捺印がある。》

哈爾濱（ハルピン）手前の松花江が軍事境界線で川を挟んで両側4キロの非武装地帯を歩く。哈爾濱までは普通の貨車だったが、哈爾濱からは無蓋車、まったく柵のない貨車だったため、皆でお金を出し合って材木を買い、枠組みを作った。



隣の車両の端にいた二人の女性はかなり弱っていて、柵にもたれかかっていた。ある朝気づくと、その姿はなかった。後年、日本に戻ってきてから、そのときのような引き揚げ団の班長をしていた隣のおじさんに聞くと、死んだので、途中、列車が川を通ったときに投げ捨てられた、と。一人でも死者が出ると、検疫のために長期間、収容所に収容されるのでやむを得なかった、と。こういうふうにもせよ亡くなっていった方も何人かいた。

奉天に着いて一週間くらい経ったとき、突然、移動の命令が出て、列車に乗る。今度は普通の貨

車だった。9月下旬、南シナ海沿岸の葫蘆（コロ）島に着く。

数日後の早朝、退去命令があり、急遽、港行きの列車に乗る。何と！ 客車だ。1時間ほどで港に着く。岸壁に整列した時、祖母が吐血した。中国側から日本側に引き渡された後だったが、係官に気づかれないよう、大勢の人の水筒の水で海に洗い流したということもあった。

《田岡さんは、旧満州国の地図を示しながら場所を説明してくれる。小さな地図で地名も小さくて分からなかったが、中国大陸の途方もない広さを感じさせられた。》

10月1日、7,000トンの貨物船は博多に着いた。道中、2歳の妹は栄養失調でかわいそうだったが、こうして、鹿児島県の出水市米ノ津町の縁戚を頼りに日本の土を踏んだ。

それから仕事口を求めて東京に一家6人で上京、江戸川区内に落ち着いた。この時も東京行きの切符は一日2枚の販売制限があり、3日かかって手に入れた。

《父親は国鉄（JR）小岩駅前で靴磨きや靴直しをしながら生計を立てた、とのこと》

まだ齊齊哈爾にいる頃、アルバムを見ていたら、おやじが写っている写真が2枚挟んであり、中国人（当時は「馬賊」と呼んでいた）を処刑するところで、将校と並んで、抜刀して立っている。憲兵伍長は憲兵隊の最下級兵で処刑（斬首）の実行者。祖母にこの写真を見せると、何も言わずにアルバムごと取り上げられた。翌日、アルバムを開くと、その2枚の写真は、もう挟まれていなかった。

おやじは、クリスチャンだったお袋に影響され、自分もクリスチャンになっていた。ある雨の夜、交通事故に遭い、奇跡的に意識を取り戻したことから神学校に通うようになり、牧師の資格を得て、青森県十和田市の小さな教会の牧師になった。

引き揚げてからかなり年数が経って、「青酸カリを捨てたよ」と言ってきたことがあった。「満州にいたときから、家族分の青酸カリをいつでも死ぬるように持っていた。やっとそれを捨てた」と。チチハルを離れる際、いざという時にこれで自決せよ、と渡されたのだとこの時知り、愕然と

した。

《田岡さんは、その後、都立両国高を経て、都立大に入学。卒業後、江戸川区立中学校の英語教師となる。》

ちょうど「第二次学テ闘争」の頃で、都教組の組合員として校内委員をした。校長交渉の時、「組合はやめても教員はできるが、教員をやめたら組合はやれないぞ。それでも明日のストはやるのか」と恫喝され、カチンときたことがある。

4年後に都立高校の採用試験に受かって、新設3年目の「足立工業」に赴任した。当時、他の高校にはあった研修日はなく、組合もなかったが、初年度からいる人達は3年目になったら、異動してきた人達とともに組合に入ろうとしていた。その人達と共に都高教足工分会を結成する。校長が「クーデターだな」と言ったのは、おかしかった。

《田岡さんは、生まれてまもなく、右目を小児ガンで失っている。》

祖母から「この子は不憫な子だ」と言われたのが、心に残る。国民学校2年生の頃、同級生から、お前なんか鉄砲を撃つところから、丙種合格で輜重（しちょう）輸卒の任にもつけない、お国のお役に立てない奴だと言われたときは返す言葉がなかった。そんな時代だった。

（注：「輜重」＝軍需品。日本の軍隊では、「輜重輸卒が兵隊ならば、蝶々蜻蛉も鳥のうち」と軽蔑されていた。）

今、NHKの番組で盲目のピアニストがそういうハンデにめげずに活躍している、それを目の当たりにしていると、戦時中のような、価値観を一つにしようという雰囲気、今また出てきている。そういう時代にはしてはいけない、と切実に思う。

多様な価値観を持つこと、そしてそれを認め合うことの大切さを若い人達には伝えたい。

...

田岡さん。インタビューの時は、背中から脇腹にかけてできた「帯状疱疹」にかかり、まだ痛みが残っていて、通院中。

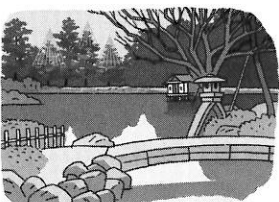
去年からフィットネスクラブに通い、小一時間ストレッチなどで汗を流しているそうです。姿勢が良くなった、と。たしかに以前と比べて、しゃっきとした印象。

乳幼児の頃から自他共に大変な環境、境遇の中で翻弄されながらも、それら一つ一つを克服し、バネにしてきた田岡さん（一家）のひたむきな姿勢に深く感動。

話しているうち、田岡さんがトレードマークのサングラスをはずし、ハンカチで涙をぬぐう姿を間近にし、一人一人が持っている（人生の、あるいは時代の）歴史の重さをつくづく感じました。

と同時に、過酷な戦争体験を持つこうした先輩だからこそ感じる「平和」への熱い想いを、後の世代がしっかりと受け止めていくことの大切さをひしひしと実感しました。

（文責：星野）



会員の森 精さんから以下のお手紙と文章「新兵は考える」が送られてきました。

「酷暑です。どういうわけか、まだ、生かされています。夏がくると思い出すのが、昭和20年8月15日です。私はこの1ヶ月前の7月20日に入営し、星一つの二等兵で、全くの新兵でした。この新兵が、近頃考えたことを『おしゃべり』しましたので、別紙(新兵は考える)をご覧ください。」

新兵は考える

私は1年早くなった繰り上げ徴兵のため、昭和20年7月20日に満19歳で、大日本帝国陸軍の現役兵(通信兵)として東部16部隊(現在の筑波大学附属駒場高校の場所)に入営しました。階級は全くの新兵なので、最下級の星一つの二等兵でした。入営して約一ヶ月後の8月15日、日本は無条件降伏をして戦争は終わりました。

しかし、8月27日の朝の点呼が終わると、突然、班長(兵長)の命令で、班長以外の全員(約15名)が二階級特進によって憲兵上

この決意の原点とはなにか

それは、地球人類として初めて経験した広島・長崎の被爆の惨状に代表される戦争の悲惨です。戦争の悲惨の極みの救いを、日本人は復讐の連鎖の断絶に求め、平和憲法を受け入れ、非核武装を決意し、地球人類の平和的共生を願ったのです。

この、復讐の断絶の決意は、偉大な「赦し」です。これなくしては全人類の地球上での共生は望めないということは、古今東西の多くの人によって説かれています。つまり、日本国憲法は地球人類の共生のための憲法でもあ

日本国がどのような国家であるかを決めるのは国民

そこで、過去の軛からではなく、人類共生という未来に立って、そこから、現在はどうあるべきかと考えることが必要になります。この考え方の転換を、全世界に向かって全力で発信するのが日本の役割ではないでしょうか。ところが、今の日本を見ますと、憲法の解釈変更で集団的自衛権の行使とかで戦争をしようとしています。

戦争とは殺し合いです。殺される前に相手を殺さねばなりません。そのために使用されるのが兵器です。兵器の最もたるものが、原爆・水爆です。私たち新兵は原爆に対して大和魂で戦えと命令されました。この命令が、再び下されるのでしょうか？

加えて、秘密保護法も施行されます。前の戦争の時代にも、厳しい秘密保護法がありました。国民は、特高と憲兵によって監視され、聞カザル、見ザル、言ワザルの状態でした。

等兵にされました。(身代わり処刑要員)二階級特進は軍神でなければありえないことです。

私はこのような戦争体験をしましたが、年ごとに戦争経験者が少なくなっています。そのためか、日本は平和憲法を持ち、核武装をしないと国家として決意したのに、その原点の認識が薄れてきています。この決意を風化させないための語り合いと、語り継ぎを日々行い、この決意を新たにしていゆかねばならないと思っています。

るわけです。

ところが困ったことに、人間は自分が経験したことは真に理解できるが、経験しなかったことは真に理解できないという悲しい存在です。そのため、被爆経験の有無を初めとする国家の各種経験の違いが、復讐の断絶という「赦し」の理解に差異を生じさせ、現在もお国際間の種々の摩擦が絶えません。この復讐の思いから脱却できないと、人類の未来はありません。

しかし、一般国民が知ることなどできないような御前会議の内容が、ゾルゲ(ソ連のスパイ)によって、ソ連に正しく伝えられていました。法律では国民の耳目を閉じさせても、スパイには向こうのようです。

このような現状は、まさに「いつか来た道」です。顧みますと、明治から昭和20年までの約80年間は、国を守るということで、戦争につぐ戦争の時代で、最後には世界と戦って敗れました。昭和20年の敗戦から現在までの約70年間は、平和憲法による平和ボケの時代とも言う人がいます。

このように、戦前と戦後を対比できますが、日本国がどのような国家であるのが良いかを決めるのは国民です。憲法と国家について、また、戦争によって国を守れるのかということについて、国民がしっかり考えることを、現在ほど必要とされているときはないと思います。

2014年8月15日 森 精 記す

辺野古・キャンプ・シュワブの坐込みは 「反基地闘争」のシンボル

安藤 哲雄

「知事選で忙しくなる人が増えて、キャンプ・シュワブに座り込む人が 10 人ぐらいに減る日もある」と聞いた。座り込みなら、後期高齢者でもできると、昨年 10 月 8 泊 9 日自炊で、1 週間座ることにした。

①. キャンプ・シュワブ

キャンプ・シュワブは海兵隊の訓練施設。上陸用舟艇が辺野古の浜を走りまわり、しばしば射撃訓練の大砲や小銃の音が響く。キャンプ・シュワブに隣接する大浦湾は沖縄で唯一水深が 30 m 以上ある。水深 30 m 以上あれば原子力潜水艦も空母も入れる。「銃剣とブルドーザー」で基地用地を強制接収された他と違い、辺野古には、経済振興のために米軍キャンプ・シュワブを誘致した歴史がある。そこに政府は普天間飛行場の代替と称して、大浦湾に軍港を、隣の遠浅の辺野古に飛行場を造ろうとしている。それが「普天間飛行場の辺野古移設」である。完成すれば今後 100 年は置かれ続ける。米軍は、沖縄は中国に近すぎるとグアム・ハワイ・オーストラリアに海兵隊を移転させ、新基地は自衛隊が管理運用し、米軍は有事にだけ使うことになると言われている。

②. 沖縄の知事選

2013 年末、仲井真弘多知事は選挙公約を反故にして、振興策と引き換えに、移設に向けた国の公有水面埋め立て申請を承認した。県知事の米軍基地建設認可は沖縄史上初めてだ。

2014 年 1 月、沖縄県議会は知事に辞任を要求する決議を可決。名護市長選も移設反対の現職が大差で勝利。知事と露骨な「アメとムチ」を繰り出す政府・自民への憤りの強さを示した。

10 月 30 日告示の沖縄県知事選は、現職の仲井真氏に対して、前回仲井真氏の選対本部長を務めた翁長雄志氏が那覇市長を辞して、保革を合わせて県民一丸で闘う。辺野古移設では「オール沖縄で政府に対峙する」と反対論を展開している。沖縄住民の 80% は移設作業の中止を求めている（琉球新報 2014.8.26）。しかし、問題はそれが投票に結びつくかである。沖縄の首長選で基地反対派は余り勝っていない。しかも、前回の衆院選と同様に票の分裂を目指して前国会議員が 2 名立候補した。

③. ゲート前の座り込み

キャンプ・シュワブ・ゲートのテントは駐車禁止でトイレもない。辺野古浜から 15 分間隔で送迎車が往復している。ゲート横の金網に「辺野古に基地はつくらせない！」等の大きな横断幕がはられ、「オナガ」「新基地建設反対！」等ののぼり旗が林立している。

○ テントは混んでいた。「土曜日だし、以前は一部左翼の闘いだったけれど、今は島ぐるみの闘いになったから」と顔見知りのシマンチュは言う。参加者の紹介と挨拶が続く。圧倒的に県退教・高退教が多い。午前午後一回ずつ「新基地いらない」「埋め立て反対」とシュプレヒコールを上げながら、ゲート前を行進する。そして県退教の指導で歌と踊り。

○ 沖縄南端の糸満のもずく業者が竹の筒を持参して、「流しもずく」をサービスしてくれた。辺野古の海に滑走路ができると潮の流れが変わり魚が獲れなくなると、糸満のウミンチュは新基地に反対だ。「金は貰ってしまえば終わり。俺は名護漁協を脱退した。」と隣に座った漁協の笠をかぶった人が言う。

○ 豊見城市長選は保守の勝利。翌日、知事選について「週刊誌は票数まで予測してオナガ圧勝としているが、新基地反対と知事選は結びつくのか分からない。保守層は全く動いていない。まず、前回の知事選で獲得した糸数さんの 30 万票を確保しよう！その上に保守票を載せて勝利しよう。」とリーダー山城さんの弁。「政府・仲井真は知事選と辺野古移設は無関係と主張している。新基地建設反対のシンボルがこのキャンプ・シュワブ座り込みです。オナガさんは 30 日の第一声をここで行います。30 日 10 時には沢山の皆さんでお集まりください」。

○ 辺野古浜からの報告。「台風で臨時制限区域を明示するためのブイやフロート（浮具）と海底のアンカー（錨）を結ぶ太い金属製ロープが切れて、フロートは浜辺に引き上げられています。海底のアンカーは激しい波浪や潮流で動きサンゴ礁が損傷を受けました。その写真を展示して記者会見

をします。」

それは写真入りで新聞に載り、社説「辺野古サンゴ損傷 環境壊す作業を中止せよ」(琉球新報 10.23)になった。

○ フロート再設置はカヌー隊が行くとやめる。海上保安庁のガードがないと何もできい。海保は尖閣と珊瑚密漁で忙しく沖縄に戻っていないのでフロート再設置は休止状態。船で辺野古浜から大浦湾入り口まで行く。海亀がいたり美しい海だ。

○ 県教育庁は沖縄防衛局に対し、キャンプ・シュワブ内にある埋蔵文化財5件の予備調査の方法と取り扱いについて、名護市教育委員会と協議するよう勧告した。埋蔵文化財の調査には時間がかかる上に、工事内容の見直しを迫られる可能性もある。(県教育庁は久しぶりに良いことをしたとみんなで拍手)

○ 「こんなビラが配られている。これを読んだ母からこんな人に投票できない!と言われた。」ビラの内容は「オナガは中国から金を貰っている。沖縄を中国に売る気だ。」この手のビラが沢山まかれていますと沖縄高退教の人は言う。普天間野嵩ゲートで「オスプレイ反対!」を叫んでいたら、「北京からお金貰っているんでしょ。失業中なんです。お金くれませんか」と言われた。「坐り込みに参加するとお金をくれるとのデマもあります。」

○ 名護市長選の投開票日3日前。保守派の応援に立った自民党石破茂幹事長は「基幹病院整備など公約実現のためには裏付けの財源が必要。新たに500億円の名護振興基金をつくる」とぶち上げた。この石破発言で流れは決まったかに見えたが、実態は既存予算の付け替えであることが分かり、逆に市民の怒りを買って基地反対派の大勝になった。この知事選でも3日前に何をぶち上げられるか、心配は絶えない。

○ 私は2012年10月オスプレイ配備反対で普天間基地野嵩ゲート前座り込みに参加した。今も続けているので一日午前中参加した。午前10時までは退教の担当だった。知事選とキャンプ・シュワブに人手を割いたため、10人ほどで旗を立て、行き交う車にプラカードを示し、ゲートから出てくる米兵に「マリンズ・アウト!」と叫んでいた。車からは手が振られ、道路の向かい側から幼稚園の子どもが盛んに手を振っていた。

キャンプ・シュワブで「週一度夕方野嵩ゲート前でゴスペルを歌っているから参加して!」と誘われた。赤く染まっていく普天間基地を前に「we shall overcome」「沖縄を返せ」で始まり、真暗くなって「we shall overcome」「沖縄を返せ」で終わった。30人ほどの参加者で、会員には仏教の住職までいた。

○ 沖縄本島を縦断して基地のない平和な沖縄の実現を訴える「2014沖縄平和祈念行脚」の一行がきた。日本山妙法寺の僧侶や元米軍人ら約20人。元軍人でつくる米国の平和団体「ベテランズ・フォー・ピース」のメンバー2人は「韓国や沖縄の人々と協力し、平和の重要性を訴えていきたい」と語った。続いて「辺野古に新たな米軍基地を造らせない、宗教者のお祈りの集い」が行われる。キリスト教、仏教、かみんちゆ神人(琉球の信仰での神職者)等20人。全員が激しく基地反対を訴え、祈り歌った。

○ 米軍キャンプ・シュワブ内の飛散性のアスベスト(石綿)を含む建造物の解体工事について、「周辺住民の健康対策が十分なのか、何の説明もないまま、工事が行われようとしている。断じて許すことはできない。」と沖縄防衛局の担当者に説明を求めた。「詳細は分からない」しかし「安全に処理する」として、防衛局は10月29日から工事を強行する態度。

みんなでゲート前の車両の出入りをストップさせて、説明を求めた。沖縄県警は機動隊を投入し、強制排除。坐り込みが警官との押し合いになった。車の出入りが終わると警官隊が引くので、再度ゲート前へ。それを何度か繰り返したあと、ゲート前に座り込んだ。機動隊は一人一人手足を持って排除した。これが連日報道されて、キャンプ・シュワブは大学生をはじめ支援者が増えた。私の帰京後も続けられ、10月30日の新聞は『沖縄防衛局名護事務所の担当は同日、現場で市民らに29日は解体工事を行わないことを説明した上で、「これから県と立ち入りの日程を再調整したい」と述べた。一方、県は琉球新報社の取材に対し、「基地内の立ち入り申請の関係で、早くても2週間後(に行う方向)で調整する』と報じている。一步前進である。

④ その後 選挙で沖縄の怒りは示された。

○ 11月16日夜8時、開票と同時に翁長当確が出た。目標の40万票には至らなかったが36万票、10万の差がついた。沖縄県民は、12月14日投開票の衆院選でも全四つの選挙区で自民党候補を

落選させて、「新しい基地はいらない」という沖縄の民意を示した。

○ こうした沖縄の民意に対して、安倍晋三首相は衆院選後の会見で普天間飛行場の固定化を避けるという理由から「辺野古移設が唯一の解決策という考えに変化はない」として、辺野古移設の政府方針は変わらないと強調した。政府は「承認に法的な問題はない」と、承認が取り消された場合は、県に行政訴訟を起こしてでも工事を進める構えだ。

そして政府・自民党は辺野古移設反対を主張する翁長県政との協議を拒否する暴挙を続け、沖縄振興予算を14年度の3460億円から約1割削減している。

○ 政府は米軍普天間飛行場の名護市辺野古のキャンプ・シュワブ沿岸部への移設計画で、近く予定する海上作業の再開を前に、シュワブのゲート前で座り込みなどの反対運動をする市民の排除を徹底するよう警察当局に指示、海上作業は（1）浮棧橋やブイの設置（2）ボーリング調査（3）仮設棧橋設置工事などを予定しており、防衛局は3月末までに終了させたい考えだ（琉球新報2015.1.3）。

○ キャンプ・シュワブで、2月9日市民らがフェンス越しに抗議の声を上げていた際、基地内の建物から出て来た米兵が拳銃を抜き、銃口を上に向けながら歩いた。

さらに米軍北部訓練場の司令官ティム・カオ少佐（海兵隊）はヘリコプター着陸帯（ヘリパッド）移設工事に住民が反対運動を続けていることについて「反対運動は共産党からお金をもらっている」などと発言。また、在沖米海兵隊報道部次長のケイリブ・イームス大尉は沖縄に全国の米軍専用施設の74%が集中していることについて「正確ではない。沖縄には（日本全国の）23%の米軍施設しかない」と日本政府や県などと異なる見解を示し、辺野古新基地建設に反対する住民らが抗議活動の際に負傷したことを「ばかばかしい（Laughable）」とも発言。在沖海兵隊の幹部に基地に反対する人々に対する侮辱的な意識がまん延していることが浮き彫りになった。

○ 2月22日、キャンプ・シュワブのゲート前の新基地建設抗議集会で、「線の中に入らないように」ということで、みんなに守るように指示をしていた山城さんを4、5人がかかかっていって、中に引きずるようにして連行され逮捕される事態となった。1972年に沖縄がアメリカから日本に復帰して以来恐らく初となる、米軍による日本人拘束という大暴挙である。

○ 沖縄県水産課は2月26日、大浦湾の現場海域で潜水調査を実施し、沖縄防衛局が県の岩礁破碎許可区域外に設置したコンクリートブロックがサンゴ礁を破壊している場所を1カ所確認した。県は調査結果を精査し、県漁業調整規則に基づく岩礁破碎の取り扱い方針に反していることが明らかになれば、許可を取り消すことも視野に入れている。許可が取り消されれば、防衛局はボーリング調査を実施できなくなる。（琉球新報2015.2.27）

○ 菅義偉官房長官は27日の会見で、アンカー設置について「県と防衛省で県漁業調整規則などを踏まえ、十分な調整を行った上で実施している」と正当性を主張。「今後もボーリング調査などの作業は環境保全に万全を尽くしながら進めたい」と述べ、作業の継続を明言した。（沖縄タイムス2015.2.28）

○ 菅義偉官房長官が国土交通省や沖縄総合事務局の幹部を首相官邸へ呼び、抗議する市民らが米軍キャンプ・シュワブゲート前に設置したテントを撤去するよう指示していたことが分かった。（沖縄タイムス2015.2.27）

キャンプ・シュワブ前に設営したテントの撤去を国が求めている件で、政府は市民らがテントの撤去に応じなければ県警を動員して強制撤去に踏み切ることを検討していることが27日、分かった。首相官邸の国土交通省への指示を受け、北部国道事務所は26日から24時間態勢で市民運動を監視している。（琉球新報2015.2.28）

私がキャンプ・シュワブに座ったときは、朝トラックでテント機材を運びみんなで組み立て、16時にみんなでテントを解体してトラックに積んでいた。沖縄防衛局が夜間に資材を運び込み始めたので、それに対応するためにテントをたためなくなったと思われる。

沖縄は軍事要塞化されようとしている。政府は強権を発動し、沖縄では基地に反対する個人の人権も県市町村の自治権も侵されている。

沖縄は「民主国家」の看板をぶら下げた日米両政府から厳しい闘いを強いられている。